2024（令和６）年度

小　論　文

10：00 ～ 11：30

文　学　部

国　文　学　科

学校推薦型選抜（一般）

注　意　事　項

1. 開始の合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があってから受験番号を小論文解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
3. この冊子は５ページあります。
4. 印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所があった場合は、すみやかに申し出なさい。
5. 小論文解答用紙は２枚入っていますが、提出するのは１枚だけです。残りの１枚は下書き用です。
6. 小論文は**縦書き**で書きなさい。
7. 冊子と下書きに用いた解答用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「和」という意識から文字と言語との関係をあぶりだしたのは、荻生徂徠（おぎゅうそらい）（一六六六～一七二八）であり、日本人の漢文にしばしば指摘される「和習（倭習、和臭）」ということばをはっきり定義して用いたのも徂徠であった。徂徠は、「文戒」（『護園随筆（けんえんずいひつ）』附）において、日本語の干渉をうけて漢文の破格が起こることを、「和字」「和句」「和習」の項を立てて論じている。

「和字」とは、和訓のために漢文を書き誤ること。たとえば「観」と「見」は、和訓ではどちらも「みる」と読むために、漢文を書くときに使い誤りが起こるとするものがそれである。こうした指摘は、徂徠の時代に限ったことではなく、たとえば徂徠の指摘する「聴」と「聞」の違いなどは、現代日本文を書くにあたってすら規範として参照される。また、一字の例に限らず、「命脈」や「遊戯三昧」（ア）などのように、漢字で書かれてはいるが漢籍には見えない使い方をされている場合にも、徂徠は「和字」と呼んで戒めている。

「和句」とは、漢文の語順が和文のシンタクス（注1）に影響されてしまうことを指す。「必ず其の本無かるべからず」のつもりで「不可必無其本」と書くのは誤りで、漢文では「必不無其本」とするべきだと徂徠は言う。もう少し微妙な例、たとえば「只亦」は誤用で「亦只」とすべきなども指摘され、徂徠の意図がカンペキ（イ）な漢文を書こうとすることにあったことが見て取れる。

そしてその微妙さの最たるものが、「和習」であった。

和習者、謂既無和字、又非和句、而其語気声勢、不純乎中華者也。此亦受病於其従幼習熟和訓顚倒之読、而精微之間、不自覚其非已。

和習というのは、和字もなく和句でもないのだが、その語気や声勢が純粋な中華のものではないものを言う。これもまた、幼いころから和訓転倒の読み方に慣れてしまったがために、精微なところで、間違いに気づかなくなってしまったものだ。

徂徠はその例として、たとえば「而」「則」「者」「也」等の助字（注2）をやみくもに①使ってはならないとか、「それを教えて善におもむ

かせることはできない」という意味で漢文を作るなら「不能使其教而之善」よりも「不能教其之善」もしくは「不能使其受教而之善」とすべきだなどと言う。「さらにこれ以上の道理は説かない」であれば、「更不説一層之理」ではなく「更説一層不去」としなければならないと言う。できるだけ「中華」のことばらしくというのが徂徠の主張なのである。

しかし考えてみれば、中国であろうと日本であろうと、文を綴るという行為においては、破格は常に起こることではないだろうか。日常言語や地域言語の干渉による破格は、そのうちでも最も生じやすいものだろう。徂徠が非難する助字の多さで言えば、六朝（りくちょう）の逸話集『世説新語（せせつしんご）』の文章は、それ以前の文章に比べて口語を多く含み、文体としても格段に助字が多いことなどが指摘されているし、漢訳仏典においては、語法はもちろん、漢字でさえも、それまでになかったものが使われる。和習と呼ばれる例が、必ずしも「和」に限るものでないことは、さまざまに指摘されている。

書記言語は、口頭言語の干渉を受ける過程で生じた破格による展開がなければ、文体の変化も語彙の増殖も行われない。ということは、その書記言語が広がり、生き延びるためには、こうした破格はむしろ必要とすら言える。他方、破格をどのようにコントロールするかは大きな課題である。徂徠にしてみれば、中華の人に通じないような漢文では、そもそも漢文であることの意味はないのだから、破格を指摘し、標準を示すこと自体は、［　A　］にかなっている。

②問題は、破格の有無ではなく、「和」という意識によって破格をくくり、その上での価値判断を行うことだ。徂徠の指摘した和習の例は、宋代以降の禅僧や儒家の語録や、西域（注3）で出土した敦煌変文（とんこうへんぶん）などに同例が見られると指摘される。ただ、中国にも同様の例があるのだから和習とは言えないという方向でそれを理解すべきではない。そうした破格が、中国の俗語や西域の言語やあるいは仏典の干渉を受けたものにも見られることを、書記言語は口頭言語の干渉によって変動するという一つの原理として理解すべきなのである。和習は、漢文が地域の書記言語として定着するさいに見られる現象の一つであることは疑いようもないが、それを「和習」として取り立てることは、やはり別の問題であるとしなければならない。ちなみに、本居宣長（一七三〇～一八〇一）は仏典の破格を「天竺習（てんじく）」と言う（『玉勝間』巻十四（六九））。

もろもろの仏教のはじめに、如是我聞（にょぜがもん）といへること、さまざま故ある事のごといひなせれ[a]ども、末々の文にかなはず、はじめにかくいへるは、いづれにしてもひがことにて、つたなきことなり。又我聞如是とこそいふべけれ[b]、言のついでも、いとつたなし。これらのこと、天竺国のなべてのならひにもあるべけれど、なほ翻訳者も拙（つたな）し。すべて漢学（からまな）びする人の、手をかけるにも、詩文を作れるにも、和習和習と、つねにいふことなるを、仏書の文には、又天竺習の多きなり。

宣長は仏典が「如是我聞」（私はこのように聞いた）ということばを必ず冒頭に置くことを、「ひがごと」「つたなきこと」として非難し、また語順としても「我聞如是」と言うべきだとする。漢学者は「和習」をやかましく言うが、「天竺習」というものもあるではないかと述べ、つまり「仏教」や「天竺」をもちだすことで、「和習」の相対化を図っているように見えるが、しかし宣長も、そうした「習」が生じること自体が、文章というものに必然の現象であることには気づいていないようだ。

徂徠における和習論の特徴のもう一つは、「文章非它也、中華人語言也（文章というのは他でもない、中華の人のことばである）」（「文戒」）のように、「文章」と「語言」（話されていることば）を別のチツジョ[ウ]として捉えずに、連続することばとして捉えた点にある。「文章」＝「語言」という定式は、まさに言語を表すために文字が生まれたという思考にほかならない。それによって、言語と文章とのずれが訂正すべきものとして強く意識され、「聖人の言語」への志向が生み出されたのではないだろうか。

繰り返し述べてきたように、文字による表現と日常の言語とは別のものである。言語を表すために文字が生まれたのでない以上、言語と文章のあいだには、当然のことながら距離があり、緊張がある。そしてその距離と緊張は、どのような場合においても、原理的に解消不能である。読み書くという行為と話し聞くという行為には、根源的な差異があり、その差異があるからこそ、言語と文章とを歴史的に積み重ね、変化させていくことが可能なのではないか。

しかし徂徠は、言語と文章が一体化した状態を理想と見なしたのであった。和習を意識し、華語の学習によって文章の正格を保とうとする徂徠の方法は、聖人の言語を媒介とした文章即言語観によるものと言えよう。

では、こうした文章即言語観は、なぜ生じたのであろうか。その一つのケイキ[エ]に、漢字とはちょうど反対側にあるかに見える「仮名」というものの存在を見てはどうだろうか。漢字で文章を綴ることがあまりに不自由なために、仮名は言語をそのまま表現できると相対的に思ってしまったこと、そこに陥穽[オ]があったと見なすのである。たとえば宣長はこう言う（『玉勝間』巻十四（八七））。

皇国の言を、古書どもに、漢文ざまにかけるは、仮字（かな）といふものなくして、せむかたなく止事（やむこと）を得ざる故なり。今はかなといふ物ありて、自由にかかるるに[c]、それをすてて、不自由なる漢文をもて、かかむ[d]とするは、いかなるひがこころえぞや。

徂徠はまさに「不自由なる漢文をもて」書かんとしたわけだが、それなら仮名で自由に書く宣長と徂徠は反対の立場にいるかというと、そうではない。日本人なら仮名文は自由に書けるという宣長の主張は、裏返せば、中国人なら漢文は自由に書けるということになる。徂徠は、漢文を自由に書くためには、まるで中国人であるかのように中国の言語に習熟すればよいとした。もちろん当時から指摘されていたように、中国においても口語と文語の違いは大きく、そう簡単には行かない。徂徠もそれは承知していたがゆえに、文章＝古人の言語という等式をもちだしたのであった。徂徠も宣長も、文章即言語を理想とする点に変わりはない。

古代の文章を尊重する「古文辞学」を徂徠が提唱したことと、文章＝古人の言語という等式は表裏一体である。そして、[③]言語に習熟すれば文章は自在に書けるという観念の支えになっていたのは、じつは、宣長が明言しているような、日本人なら仮名文は自由に書けるという意識だったのではないだろうか。

（齋藤希史『漢字世界の地平』による）

注

1　シンタクス……構文法。単語を組み合わせて文を作る時の規則。

2　助字……漢文で、文の組み立てを助ける付属語。文末の「也・焉・哉・乎」、文中で副詞的機能を果たす「於・于・者・之・而」、動詞の態を示す「被・使・令」などの類。助語。助辞。

3　西域で出土した敦煌変文……「敦煌」は中国甘粛（かんしゅく）省北西部のオアシス都市で古く西域交通路の基地として栄えた。「変文」は敦煌付近の千仏洞石崛で発見された俗文学書の一つで、韻文と散文を交えた一種の語り物。

4　它……「他」に同じ。ほかの。べつの。

問一　傍線部ア～オについて、漢字は読み方をひらがなで書き、カタカナは適切な漢字に改めなさい。

問二　二重傍線部a「れ」、b「べけれ」、c「るる」、d「む」の助動詞についてこのときの活用形を書きなさい。またそれぞれの助動詞の意味を次の［語群］の中から一つずつ選んで書きなさい。

［語群］　受身　尊敬　自発　可能　使役　完了　存続　打消　過去　推量　当然　意志　断定

問三　傍線部①「やみくもに」とはどのような意味か、書きなさい。

問四　空欄［A］に入る漢字一字を書きなさい。

問五　傍線部②「問題は、破格の有無ではなく、「和」という意識によって破格をくくり、その上での価値判断を行うことだ」とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜか、一〇〇字以内で説明しなさい。

問六　傍線部③「言語に習熟すれば文章は自在に書けるという観念」に対し、あなたはどのように考えるか、賛否に関わらず、必ず具体的な例や根拠を挙げて、六〇〇字以内で書きなさい。